『世間の学』vol.1、日本世間学会、2009 年 12 月、pdf 版

「世間」概念の二重性
――阿部謹也、「世間論」を検討する――

田中史郎（宮城学院女子大学、経済学）

はじめに
１．世間のイメージないし定義
２．社会と世間との差異
３．世間の原則、ないし掟
４．西欧における社会と個人の成立
５．世間の由来と構造
６．世間のネガティブな側面
７．世間のポジティブな側面
８．暫定的な総括と今後の課題

はじめに

「世間論」といえば、誰しも阿部謹也の諸著作を連想するであろう。多岐にわたる阿部の業績の中でも、世間論が重要な位置を占めていることは多言を要しまい。また、しばしば「世間を対象化すること」の必要性を強調していた。とりわけ、晩年においてはそうである。

にもかかわらず、阿部の世間概念は必ずしも一義的ではないように思われる。たとえば、熱心な読者に、「阿部先生の『世間論』とはどういうものですか？」と問うてみればよい。きっと誰もそれに即答はできないだろう。というのも、阿部は「世間」に関して幾多の著作を上梓しているが、それゆえもあって、「世間」の概念や定義、あるいはインプリケーションはその都度、微妙に異なっているようにもみえる。

しかし、そればかりではない。そのような含意のいわば揺らぎにみえる多義性は、じつは、何よりも「世間」そのものがそうであるからに他ならない。それゆえ本稿では、阿部「世間論」の構造を解読しつつ、「世間」概念の二重性を析出したい。それは概念の混乱や矛盾ではなく、むしろ可能性を孕むものなのである。

１．世間のイメージないし定義

一口に「世間」といっても掴み所がないので、阿部の著作から、まずそのイメージないし定義を一瞥しておこう。

「「世間」という言葉は自分と利害関係のある人々と将来利害関係をもつであろう人々の全体の総称なのである。」(『「世間」への旅』7-8 頁)と述べられている。そして、具体的には、政党の「派閥」、大学の「同窓会」、花やお茶あるいはスポーツなどの「趣味の会」、大学の「学部」、会社の「人脈」、「近所付き合い」などが例としてあげられる。

すなわち、「基本的には同質的な人間からなり、外国人を含まず、排他的で差別的な性格をもっている。...会員名簿もなく、会則もないから、誰が会員であるかは誰にも解らないが、その人の社会的地位や普段の言動などからおおよそ誰が自分と同一の「世間」の人間であるかは解るのである。」(『「世間」への旅』8 頁)、と。

このような規定をもって「世間」のイメージないし定義とすることには、異論はなかろう。必ずしも、確定的な定義とはいえないが、このようなイメージを共有するところから議論を進めてゆこう。

２．社会と世間との差異

今日の普通の用語法では、「世間」とは、いうまでもなく、人間と人間との関係であり、人間の集団であるので、それと、いわゆる社会との関係が問われることになる。周知のように、阿部は、日本においては、西欧のような社会は存在していないと、一貫して主張している。

そこで、「社会」と「世間」との差異を確認しておくことにしよう。そうすることによって、「世間」のイメージないし定義はより明確になるだろう。

まず、いわゆる「社会」のイメージないし定義をみておく。「「社会」はいわば近代的な用語の世界であり、貨幣経済を軸とする表向きの構造をもっている。」(『「世間」論序説』10 頁）と述べられている。また、次のような叙述も存在する。「欧米の社会という概念が対象としているのは現世の生活のみであり、死と来世のイメージ、それと関わる法事、神社・仏閣の関わりなどはこの概念と無関係である。」(『「世間」への旅』5 頁)。

これに対して、「世間」のイメージは、以下のように対比される。「「世間」は主として対人関係の中にあり、そこでは貨幣経済ではなく、贈与・互酬の原理が主たる構造をなしている。」(『「世間」論序説』10 頁)。また、「わが国の「世間」という概念は世俗だけでなく、来世をも含んだ概念であり、死後の生のあり方を暗示する言葉でもあった。」(『「世間」への旅』5 頁)という。

それゆえに、「社会という概念が定着してゆくとそこから抜け落ちてしまう諸分野が生まれ、それらは政治の世界とは切り離された宗教の世界の出来事として位置づけられていったのである。個人という概念も純粋に世俗的な概念であり、‥‥一種の法的、社会科学的概念として理解されてきた。」(『「世間」への旅』5 頁)、となる。

「社会」の成立と「個人」の成立とは同様の出来事の表裏の関係にあり、これらは共に、世俗的・現世的なものである。そして、そのような世俗的・現世的でない部分は宗教として成立したというわけだ。あるいは、宗教が成立することによって、世俗・現世の概念である「社会」や「個人」が成立したともいえよう。一方において社会と個人とが分節化され、他方で世俗と宗教とが分節化されるという中で、それぞれが成立していると考えられている。

やや別言すれば、「社会」のイメージに繋がるキーワードをあげるとすれば、近代、資本主義、商品関係、個人、競争...等々であり、それに対して、「世間」のそれは、非近代、非資本主義、人格関係、集団、協調、縁故...等々ということになろう[1)]。

ともあれ、こうした社会と世間との位置関係の議論も納得がいく。しばしば阿部の主張するように、日本には社会は存在せず、存在するのは世間であるというという議論は、このように整理することによって理解できよう。

３．世間の原則、ないし掟

以上のように「世間」のイメージを、「社会」との対比を交えつつ、確認してきた。ここで、それをより明確にするために、世間の原理や原則、ないし世間の掟といわれる問題に関説しておきたい。

阿部は、種々の文脈の中で、「世間の原則」ないし「世間の掟」という表現で、世間の内実を明らかにしている。しかし、ここでもその表現は必ずしも一定ではない。比較的早い時期には「二つの原則」として示され、後に「三つの‥‥」という表現を経て、「四つの原則」として、定式化していったように思われる[2)]。ここでは、最晩年の四原則論を検討しよう。

阿部は述べている。「ではこの「世間」はどのような人間関係をもつていたのだろうか。そこにはまず贈与・互酬の関係が貴かれていた。‥‥「世間」の中には自分が行った行為に対して相手から何らかの返礼があることが期待されており、その期待は事実上義務化している。」(『近代化と世間』95-96 頁)

「贈与・互酬とは、‥‥マルセル・モースが提唱した人間関係の概念であるが、‥‥その基礎には呪術があったとしている。」(『近代化と世間』95-96 頁)

「次に問題になるのは長幼の序である。‥‥年長者に敬意を払うという意味であるが、ときには年長者を馬鹿にする場合もある。」(『近代化と世間』97 頁)

「次に時間意識の問題がある。「世間」の中には共通の時間意識が流れている。日本人の挨拶に「今後ともよろしくお願いします」という挨拶があるが、これは日本特有のものであって、欧米にはそれに当たる挨拶はない。」(『近代化と世間』97-98 頁)

みられるように、世間の原理あるいは原則として、「贈与・互酬」、「呪術」、「長幼の序」、「共通の時間意識」の四点があげられている。そして、これらの四点を具有する世間は、日本独特のものであり、西欧には存在しないという。よって、こうした問題を抜きにして、様々な問題を考えることは不可能だというわけである。

では、ここであげられた四つの世間の原則ないし掟は、それぞれどのような関係をもち、位置づけられているのか。世間の構造を理解するには、そうしたことが不可欠であるが、その点の考察の前に西欧における世間の解体の問題をみておこう。

４．西欧における社会と個人の成立

これまで、世間の内実を掘り下げてきた。阿部は世間を、現代の西欧にはみられない、日本固有のものとして把握しているが、しかし、かつてそれは西欧にも存在し、今日では

解体しているとみる。では、この西欧における世間の解体は、どのようにして生じたのか。

阿部は、「12 世紀ぐらいまではヨーロッパにも「世間」があったと思います。」(『日本社会で生きるということ』62 頁）と述べ、それを「わが国の「世間」と対比し得る集団」(『日本社会で生きるということ』12-13 頁）という。「それは日本の「世間」とそれほど違わないものであったが、キリスト教の浸透以降‥‥キリスト教の教義のもとで統一されていった‥‥」(『近代化と世間』117 頁)と。このように、かつて同じように存在した「世間」は、12 世紀頃から西欧と日本とで別個のコースを辿ったことにより、日本では存続し、西欧では解体したとみるのである。

西欧における「世間」からの離脱、つまり、「個人」や「社会」の成立の端緒を 12 世紀にみるわけだが、その際、「都市」の成立と「告解（こくかい)」の普及が注目される。

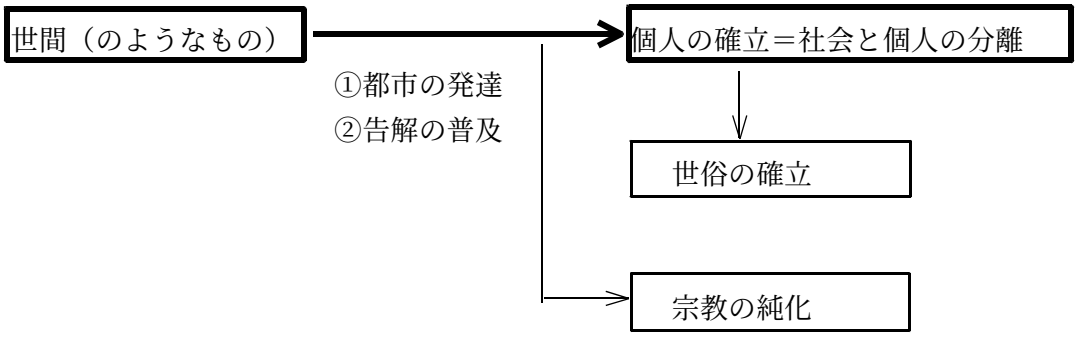
まず、前者にかんしてみてみると、「都市には手工業者が生まれ、職人、徒弟などを含めて新しい市民層が生まれたのである。‥‥市民層は新たに生まれた貨幣経済の中に取り込まれてゆくことになる。」(『近代化と世間』18 頁)。マルクスを持ち出すまでもなく、商品・貨幣経済とは、独立した個人を前提として成立するものであり、またその浸透はそのような個人という概念を強固なものにしてゆく。商品・貨幣経済と個人とは相互的に確立するといえる。個人の成立とともに社会も確立し、これらは世間から離脱するというわけである。

そして、阿部は後者の論理を以下のように示す。「12 世紀にはカトリック教会が告解を奨励した。1215 年のラテラノ公議会では告解が義務づけられていた。」(『近代化と世間』18 頁)。「個人の私的領域における行為について、絶対的な権威の前で責任をとる姿勢を示さねばならなかったのである。‥‥告解という制度が個人による自己の行為の説明からはじまる以上、個人が自己を意識する大きなきっかけとならざるをえなかったのである。」(『西洋中世の愛と人格』104 頁)。

告解とは自己のそれまでの行為を、とりわけ罪を告白することだが、したがって、それには個人が前提となる。そして、またその普及は、個人という概念を強固なものとしていくことになるといえよう。キリスト教という宗教の成立によって「個人」が生まれたという先の論理の核心は「告解」にあったというわけである[3)]。

以上を図示すれば次のようになろう。

［図］西欧における「世間」の解体ないし個人・社会の成立



すなわち、それまでは日本においても西欧においても「世間」（のようなもの）は存在していたが、12 世紀頃から西欧においては変化が生じた。都市つまり商品経済の発達と告解つまりキリスト教の普及により、第一に、個人の世間から離脱が生じ、個人と社会が成立することになった。それらはいずれも現世つまり俗世のことゆえ、第二に、それに対して、「世間」にあった俗世を超えた部分が、宗教として純化することになった。こうして、社会と個人、そして宗教が明確な概念として成立するが、それによってまた、商品経済と宗教はより純化するというスパイラルが生まれ、今日に至っているということである。阿部によれば、これが西洋史のメインストリームということであろう。

５．世間の由来と構造

前々節で世間の原則を、そして前節では世間から個人・社会および宗教が分離し、確立する過程をみた。ここではそれらをふまえて、日本における世間という用語の由来を確認し、さらに先の世間の原則がどのような構造になっているのかを考えたい。

西欧において世間が解体する過程をみたが、これに対して、日本の「世間」とはどのようなものか。まず、その用語法を確認すると、「「世間」という言葉は古来、世間無常、世間虚仮（こけ）として使われてきた。」(『「世間」への旅』10 頁)とされる。

無常も虚仮も仏教用語で、「不変もの・確かなものはない」、あるいは「実体がない、空虚である」、といった意味である。いずれにしても、無常や虚仮には個人の意志や神の意志といったものは存在せず、それとは対極のイメージである。それゆえ、それが人間集団の意味で用いられると、いわゆる生者ばかりではなく、そこには死者も含まれることになる。

さて、このような世間と先の世間の原則はどのように捉えられるのか、西欧における社会と個人、そして宗教の成立を前提に考えよう。

すなわち、世間の掟ないし原則である、①「贈与・互酬の関係」、②「長幼の序」、③「共通の時間意識」、④「呪術性」の四つの原理がどのような関係になっているのかということに他ならない。

既述のように、西欧では 12 世紀頃からキリスト教という一神教が成立してきたが、これらの問題はそれと不可分の関係にあるといえる。世間の掟は、一神教が広範に成立していない人間集団における個々人の関係から導き出されるイデオロギーといえるのではないか。

まず、④「呪術性」から考えよう。「呪術性」をアニミズムと置き換えるとわかりやすいが、それは、一神教が成立するとともに、存在しなくなることは容易に理解できる。様々な俗信や迷信、あるいは有形無形のあらゆるものに「神」をみいだすような習俗は、すべてキリスト教に吸収されたわけである。したがって、一神教が未成立の「世間」においては、呪術性が存在するのは必然である。

さて、ついで①「贈与・互酬の関係」、②「長幼の序」、③「共通の時間意識」、についてだが、これらは、神が存在しない集団の中で秩序を保持するイデオロギーとして理解出るのではなかろうか。「不変もの・確かなもの」がない、「実体がない、空虚である」とい

うような集団、生者も死者も含まれるような集団においては、こうしたイデオロギーが生み出される根拠がある。逆にいえば、神が存在すれば、これらはすべて神との関係の中で処理されるということに他ならない。

すなわち、神が不在であるならば、それとは別の秩序が要請される。また、神が不在ゆえ、集団の境界は曖昧で、「世間」は時と場合によって如何様にも範囲が広がったり、縮まったりする。たま幾重にも重なったりする。そうした中においては、集団の「ウチとソト」を際だたせる秩序が求められるともいえる。世間の掟のような過剰な同調圧力もそこから生じる。

換言すれば、「ウチ」の空間的な秩序が①「贈与・互酬の関係」と②「長幼の序」、そして「ウチ」の時間的な秩序が③「共通の時間意識」ということになるのでないかと思われる。一般的にいって、集団は空間的な、時間的な安定性があってはじめて持続的な存在の根拠を得るといえる。これら「贈与・互酬の関係」と「長幼の序」を集団の構成員が日々確認することで、つまり互いに強制することで、世間が成立しているといえよう。

そして、こうした構造をもつ世間は、しばしば指摘されるように、排他的であり、前近代的でもある。しかし、阿部のいうように「決して日本が欧米に比べて劣っているというわけではない。」(『近代化と世間』117 頁)のである[4)]。

だが、こうした評価の問題には慎重でなければならない。ついで、その点を考察しよう。

６．世間のネガティブな側面

まず世間のネガティブな側面を取り出してみよう。

阿部は次のように述べている。「わが国の「世間」は人が作り上げてゆくものというよりは運命的に存在しているもの、所与として受けとめられていったのである。」(『「世間」への旅』11 頁)。世間とはこのように、人々の意志とは別なところに、「所与」として「運命的」に存在すると考えられている。先の四つの世間の掟を遵守する以外に選択肢はないということであろう。世間のウチにおける掟とソトに対する排他性も、こうして構造化されている[5)]。

したがってそれは、「人の力によっては変えられないものとして位置づけられ」(『「世間」への旅』11 頁)ることになる。きわめて過剰な同調圧力を感じつつも、それに従わざるを得ない。よって、「以上のような世界の捉え方のもとでは変革の思想が生まれるはずがなかった。」(『「世間」への旅』12 頁)という結論に至る。

そして、「「世間」に対するこのような否定的な位置づけは万葉集から江戸時代に至るまで連綿として続き、近代に至っている。」(『「世間」への旅』10-11 頁)、というわけである。

世間のネガティブな側面としてこれを概念化してよかろう。

７．世間のポジティブな側面

以上のような、世間のネガティブな側面を強調することが阿部「世間論」の主調音だが、それとはやや異なった音調も聞こえてくる。それらを三点に絞って提示しよう。

その第一は、防波堤（セイフティーネット）としての世間である。阿部は次のように述べている。「(明治以降）企業も行政も新しい組織を作り、その中に位置づけられることになった人々は旧来の「世間」という枠組みの中で辛うじて自己を守ることができた。」(『「世間」への旅』14 頁)。「近代化を標榜する政府のもとで、日本人は...西欧的諸関係を表向きには維持しながら、実際は「世間」...を頼りに生きてきたのである。」(『「世間」への旅』15 頁)。

みられるように、国家の枠組みの中にあっても、企業の中にあっても、表向きの「近代化」や「新しい組織」に反して、人々は「世間」を頼りに、それを安全網として生きてきたという。多くの人々にとっては、最後には世間以外に頼るものがなかったのである。ここでは細かな実証はできないが、そうしたことは十分にいいうる。これを防波堤（セイフティーネット）としての世間としてポジティブに評価できよう。

第二は、公共性（パブリック）としての世間である。阿部の言葉を引用しよう。「それ（世間）は広く捉えれば公共性とも呼ぶべきものであり、自己の欲望を抑制し、集団の利益を優先するための指針であった。」(『「世間」への旅』17-18 頁)。「常に自分の「世間」を意識して暮らしているのです。自分の「世間」というのは一種の公共性という観念と近い意味を持っていて、おまえのする行動が正しいかどうかということはいつでも見ていますよという形で「世間」が見ている。」(『日本社会で生きるということ』82 頁)。「「世間」の中に個が縛られている状況を脱却しなければいけないと私は考えていますが、しかしそれと同時に「世間」が持っていたかつての公共性的機能を失うことなく保持することができるかどうかも大問題です。」(『日本社会で生きるということ』 185 頁)。

神の存在しない日本では、規律や秩序の根幹をそれに求めることができない。そうした中にあって、規律や秩序は世間に求められることになる。それゆえ、世間は公共性としての意味も持つということである。

もちろん、現在の日本の公共性としての世間といっても、それは「公」ではなく「官」を意味することが多く、最終的には天皇制に絡め取られるという危険性もないわけではない[6)]。しかし、可能性として公共性（パブリック）としての世間をポジティブに考えることは無理であろうか。

そして、第三には、自然（エコ）ないし共生空間としての世間である。阿部は述べている。「「世間」という概念は、‥‥自然界の事象としての器世間と人間と人間の関係としての有情世間からなるものであった。」(『「世間」への旅』16 頁)、「その（世間を考察する）際、私たちがかつて「世間」が空間としてもっていた意味をも忘れてはならない。人間の生の営みは「世間」においては常に昆虫や小動物の生の営みと深く結びついていたのである。」(『「世間」への旅』18 頁)。

みられるように、阿部はここで「器世間」、すなわち森羅の自然空間としての世間の意義を強調している。人間だけではなく、あらゆる生命体、あるいは非生命体も含まれるかもしれないが、ともあれそうした万物を共生空間として捉える視点、これが「器世間」という概念をもって明確にできるというものであろう。こうした深い洞察は、昨今の商業主義的なエコブームを鋭く批判するものである[7]。これを、自然（エコ）ないし共生空間としての世間として捉えることができるのでなかろうか。

８．暫定的な総括と今後の課題

阿部「世間論」の構造を、以上のように理解できるのではないかと考える。そのテキストクリティークを通して、「世間」のネガティブな側面およびポジティブな側面の二側面を取り出してきた。阿部「世間論」にはこのような二側面が存在するのであって、これを「世間」概念の二重性といってよかろう。これは混乱ではなく、今後の可能性を孕むものである。

そこで、強調したいのは、「世間」のネガティブな側面を十分に考慮しつつ、そのポジティブな面をより積極的に考えるべきではないかということである。

すなわち、「自然ないし共生空間としての世間」という問題の提起は、昨今の浅薄なエコブームの次元を超えて、自然と人間との関係を見直す議論を提供している。また、「防波堤としての世間」の提起は、国家による社会保障論や社会福祉論を超えて、市民（人民大衆）によるセイフティーネット（安全網）構築の意義を示唆しているといえる。さらに、「公共性としての世間」は、国家からの秩序の強制、たとえば刑事法における厳罰化の方向とは反対に、モラルサイエンス確立の議論に道を拓くものであろう。

これらの提起は、最近のコミュニタリアニズムに連動する側面をもつということもできるが[8)]、そうした問題をも射程に入れてさらに深めてゆきたい。そのような試行が、阿部のいう「世間を対象化すること」だと考える次第である。

１）こうした「世間」と「社会」の概念を援用しつつ戦後日本の経済社会分析を試みたことがある。田中史郎「いま、なぜ世間なのか」を参照されたい。

２）たとえば、『「世間」とは何か』（1995 年）には、「世間には厳しい掟がある。‥‥その背後には世間を構成する二つの原理がある。一つは長幼の序であり、もう一つは贈与・互酬の原理である」(17 頁)と述べられており、同年発行の『北の街にて』（1995 年）にも「「世間」には掟がある。それは長幼の序と贈与・互酬の関係である」(203 頁)と記されている。また、『ヨーロッパを見る視角』(1996 年)においても、同様に「世間という人間の集合体には‥‥二つのルールがあって‥‥」(20-21 頁)として、「長幼の序」と「贈与・互酬」があげられている。

だが、『日本人の歴史意識』(2004 年)では、「「世間」の中に生きる人々の行動の原理は三つの原則によっている。」(7 頁)として、先の二つの他に「共通の時間意識」が加わっている。そして、『近代化と世間』(2006 年)に至ると、本文で明らかにしたように、さらに「呪術」が付け加えられ、いわば四原則という構造になっている。

なお、佐藤直樹『暴走する「世間」』では、阿部の四原則を前提として、「「世間」を構成する原理」として定式化している。

３）告解と個人の成立に関しては、『日本人の歴史意識』(115 頁)も参照されたい。

４）たとえば、「こうした（世間の）実状はしばしば指摘されるが、それはわが国の近代化の遅れとして位置づけられることが多く、本質的な解決になっていないのである。」(『「世間」への旅』6 頁)と述べられている。ここでは、日本の「世間」というものが単なる近代化の遅れとして把握できる代物ではないことが示されているが、その「本質的な解決」とはどのようなものか明らかではない。しかし、それは近代化をさらに推進する方向にはないこと、このことは明らかだろう。

なお、日本のように、西欧に対して後発の資本主義国では、しばしば「近代化の遅れ」、あるい

は「前近代性」の問題が遡上にのぼる。こうした問題を考えるうえで、K.マルクス「ヴェ・イ・ザスーリッチへの手紙」が参考になる。これは、ロードニキの活動家ザスーリッチから問われた、ロシアの前近代性をどうみるかに対する返信だが、マルクスはこのために三回も草稿を書き改め、実際に返信したのは第4稿である。それだけ考え抜いて書かれた文書といってよい。ともあれ、その中でマルクスは、ロシア社会に残存する人間の共同体的関係は未来社会の基礎となりうることを記している。それまでの単線的歴史観を超えるものとして注目されているが、「世間」を考えるうえでも示唆に富む。

5）たとえば、阿部は以下のように述べている。「「世間」がもつ排他性や差別的閉鎖性は公共の場に出たときにはっきり現れる」(『「世間」論序説』8頁)

6）阿部は、次のように、公共性としての世間を冷静に評価している。「公共性という言葉は公として日本では大きな家とい意味であり、最終的には天皇に帰着する性格をもっている。‥‥公共性という場合、官を意味する場合が多い。」(『近代化と世間』98頁)。公共性としての世間を問題にする際には、深慮すべき指摘である。

7）いわゆる環境問題にかんする常識を疑うものとして、池田清彦『環境問題のウソ』、池内了『疑似科学入門』が参考になる。

8）コミュニタリアニズムにかんしては、青木孝平の一連の著作、とりわけ、『コミュニタリアニズムへ ― 家族・私的所有・国家の社会哲学』が参考になる。

［引用文献］

阿部謹也『西洋中世の愛と人格 ―「世間」論序説』朝日新聞社、1992年、(後に、『「世間」論序説 ―西洋中世の愛と人格』朝日選書、1999年

――――『「世間」とは何か』講談社現代新書、1995年

――――『北の街にて』講談社、1995年、(後に、洋泉社MC新書、2006年)

――――『ヨーロッパを見る視角』岩波書店、1996年(後に、岩波現代文庫、2006年)

――――『日本社会で生きるということ』朝日新聞社、1999年(後に、朝日文庫、2003年)

――――『日本人はいかに生きるべきか』朝日新聞社、2001年

――――『学問と「世間」』岩波書店、2001年

――――『日本人はいかに生きるべきか』朝日新聞社、2001年

――――『日本人の歴史意識 ―「世間」という視角から』岩波書店、2004年

――――『「世間」への旅―西洋中世から日本社会へ』筑摩書房、2005年

――――『歴史家の自画像　私の学問と読書』日本エディタースクール出版部、2006年

――――『近代化と世間　私が見たヨーロッパと日本』朝日新聞社、2006年

青木孝平『コミュニタリアニズムへ ― 家族・私的所有・国家の社会哲学』社会評論社、2002年

池内　了『疑似科学入門』岩波書店、2008年

池田清彦『環境問題のウソ』筑摩書房、2006年

佐藤直樹『暴走する「世間」』バジリコ、2008年

田中史郎「いま、なぜ世間なのか」、『世間学への招待』(阿部謹也編)青弓社、2002年

K.マルクス「ヴェ・イ・ザスーリッチへの手紙」、『マル=エン全集』大月書店、第19巻

――――「ヴェ・イ・ザスーリッチの手紙への回答の下書き、第一草稿・第二草稿・第三草稿」、『マル=エン全集』大月書店、第19巻